
第柔指南抄
十一之下

作者未詳

朝影。尒吾身者成
辛衣
のさりげまわが衣ならねど
褄之不相。而久成者
すそのあることすくなれい
解衣之思亂而雖戀
こもるねのみなれてこれども
何如汝之故跡問人毛無
あるものゆへとふ人もなし
摺衣著有跡要見津寤者
すりごろもきるしるしをまつつかい
執人之言可將繁
いふれのひとことのさけくん
忘賀乃白水郎之鹽燒衣雖織
とうのあまのやくしほごろもきるといふ
戀云物者忘金津毛
こひてふものはわすれかねつも

万十一下口 兆八一

朝旦
昊蓋之八鹽乃衣
織者雖爲
益希將見
裳
これをのやとしほごろもきるもの
ましてみまくほしきを
紅之深染衣色深
くれなゐの深染のころもいろふかく
染西鹿歯蚊遺
不得鶴
そめてしかのよわたるつるの
不相尒久卜平問常幣尒置尒
あはずにひさしくなりぬとうらへとの
吾衣手者又曽可續
わがころもでまたかさねつべき

旅にして妻恋する人のよめるうた一首
なにはがたみじかき葦のかりそめの一夜をこもるわれならなくに
右の一首は、或る書に曰はく、天皇の難波宮に幸せる時に、聖徳を讃めたてまつりて作れる歌なりといへり。

天皇の蒲生野に遊猟したまひし時に、額田王の作れる歌
あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る
皇太子の答へたまへる御歌
紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも
天皇の近江の宮に天の下治めたまひし御世に、宮人の袍の色を改め給ひて、冠位の階を換へたまひき。ここに、時の人の感へる歌
味酒を三輪の山あをによし奈良の山の山の際にい隠るまで道の隈い積もるまでに委曲も見つつ行かむを数多くしあらねばうらめしみ振り放け見つつ思ひそ我がする

ふるころもうち捨人
古衣ハ打捨人の枕詞
也捨られし身と云也
はねかつらいまする
見安云玉かつらとかき
あまの物のかつら也 業一
二句ハうらわかみこゝろん
温見ハゑみいかりの恣ふ
さあしまそしれ玉ふ
ことくなるへし
いにしへの志つはたおひ
いにしへのさきハ古き心
志つはた帯ハ織の織
布の帯也 上るハ丸
こはそん序也 一云
さをりの帯ハせまく
織し帯也 派ハ助字
ありすらしわまとこそ也
枕と形みてよめ
るなし 本也
むすひひもとかん日
あけるる日乃今へ
頃するとみる也
うたかひもなし与
心明也
ますかゝみてにとりも
鏡ハみすかといふん枕
詞也事を見て 枕詞と
定ける事 此集にわかれ
ますかゝみたゝにしなる
上句ハみんときさへやの
序也 夢にも ねむ時ハ見ゆる

2626 古衣打棄人者秋風之立来時尓物念其
ふるころもうちすてひとはあきかせの
たちくるときにものおもふそのも

2627 波祢蘰今為妹之浦若見咲見慍見着四紐解
はねかつらいまするいもかうらわかみ
ゑみゝいかりみきてしひもとく

2628 去家之倭文旗帯乎結垂孰云人毛君者不益
いにしへのしつはたおひをむすひたれ
たれといふひともきみにはまさし

一云 古之狭織之帯乎結垂誰之能人毛君尓波不益
いにしへのさをりのおひをむすひたれ
たれしのひともきみにはまさし

2629 不相友吾波不怨此枕吾等念而枕手左宿座
あはすともわれはうらみしこのまくら
われとおもひてまくらてさねませ

2630 結紐解日遠(左書凡一歟)敷細吾木枕蘿生来
むすひひもとかんひとほみしきたへの
わかこまくらはこけむしにけり

2631 夜干玉之黒髪色天長夜叫手枕之上尓妹待覧蚊
うはたまのくろかみしきてなかきよを
たまくらのうへにいもまつらんか

2632 真素鏡直二四妹乎不相見者我恋不止年者雖経
まそかゝみたゝにしいもをあひみすは
わかこひやましとしはへぬとも

2633 真十鏡手取持手朝旦将見時禁屋恋之将繁
ますかゝみてにとりもちてあさなさな
みんときさへやこひのしけゝん

2634 里遠恋和備尓家里真十鏡面影不去夢所見社
さととをみこひわひにけりますかゝみ
おもかけさらすゆめにみえこそ

劍刀 身不佩 副流丈夫也
懇云物 平恐 金手武
諸刀之於荷去 觸而
歌に殺鴨 特死 懇 管不有者
鼻中肖 噫 鷹 劍刀
身副 妹之思 来下
梓弓 末之腹 野 爾鷄田 爲
君之弓食之 特純 跡 念寵屋

引見 弛 見不来者 不来
来者其平奈 何 不レ来者 来者 其平

時劒姫と 日本紀二五千弓小千人の女をよりつゝ彼 穂持 狂 持なのまま成て
礼奇 婚
礼乃成し

集雜 巻 人丸の哥

劍刀 身不佩 副流丈夫也
懇云物 平恐 金手武
諸刀之於荷去 觸而
歌に殺鴨 特死 懇 管不有者
鼻中肖 噫 鷹 劍刀
身副 妹之思 来下
梓弓 末之腹 野 爾鷄田 爲
君之弓食之 特純 跡 念寵屋

引見 弛 見不来者 不来
来者其平奈 何 不レ来者 来者 其平

時劒姫と 日本紀二五千弓小千人の女をよりつゝ彼 穂持 狂 持なのまま成て
礼奇 婚
礼乃成し

集雜 巻 人丸の哥

去イ尓 物有 不レ念 斐 太 人乃
打 墨縄之直 一道 二
足日木之山田守翁 置 蚊火之
下粉枯耳 余 戀 居久
十数 板持 盖 板目乃不合翔 者
如何 為 跡可 吾宿 始
難波 人 葦 火 燎屋之 酢四手雖有
已 妻 許増 常 目 頬 次 吉
万葉下 四十二

妹之髮上 小竹葉野之放 駒
荒去 家良思 不合 思 者
馬 音之跡柃登毛為 者 松陰 尓
出 曽見 鶴若 君 香 跡
君 戀 寢不宿 朝明 誰 衆流
馬足 音 聞 為

うまれをのそ(ト)動
ぐい馬の号成
まそうといねね多
そのてるとまく心
れるものすういく
赤裳をり風
一云ともに心い
あまるやの社方
天飛屋といいけて
狭い擬い童蒙抑神る
狭い擬い童蒙抑神る
と狂する森のまる
しこ序ふ
のをを
おみるいいるき
仙田いとるき
(ヒモロギ)

(ヒモロギ)離
おつ
心い神もまりり
序ふ
真なれいせん
よそうぐい神
あるん
ある
真偽を知て我
よそうぐ
(多者神毛悪為縦咲八師)
(世副流君之悪有莫君爾)
よそうぐ
(夜並而君宇来座跡千石被)
よそうぐ
(神社平不祈無)
(霊治波布神毛吾者打葉乞)
(四恵也寿之恍無)
衣並
ハ初
ハ
童蒙抑云
(ヒモロギ)

(紅之襴引道平須藤衛河平)
(置而妾哉将通公)
(中哉将待香将待)
(天飛也輕乃社之齋槻)
(幾世及将有隠イニシヘ嬬其も)
(神名火尓縦呂す去雖忌イハヒくも)
(人者聞守不敢物)
(天雲之八重雲隠鳴神之)
(音尓耳八方聞度南)
(多者神毛悪為縦咲八師)
(世副流君之悪有莫君爾)
(夜並而君宇来座跡千石被)
(神社平不祈無)
(霊治波布神毛吾者打葉乞)
(四恵也寿之恍無)
之
(ヒモロギ)

童蒙抄云久月者とは空くくらくうつろひて
てゆくをいふ成へし空の月の入るほどのそのほとをいふ
にかくいふ成へし抜回久月者とは人とともに暁のうつるをいふ
よめるこゝろ也みよの心ハ久今夜の月の入ほどの
ほのくらきに別れをしむ心也

月しあれハこそくらん
月之有者明覧別業不知而

月しおもハゝくらんわすれ草
吾來乎人見兼鴨

わすれ草人見ぬ
欲家口々闇之

ことのためのわすれ草
妹目之見巻

木葉隠有月待
如

このそことこゝろまつ
真袖持拭君待跡

まつてもあらぬことおもひ
居之間介月傾

なりぬるか
二上介隠經月之雖惜

まつ夕ハ月のおしきかな

妹之田本平加流類比来
いとくしくもとをりこのころ
吾背子之振放見作将レ嘆
わりせとりみわけそうるはしくらん
清月夜介雲莫田名引くもまるひき
きよきさ月よたに雲もひくな
真素鏡清月夜之湯ゲ徒去者
念者不レ正戀杜益
おもひいとやすくひこそやされ
今夜之こよひのやイ在開月夜在作文
このよれりあけの月夜もつも
公叫置者待人無
きみをまきくいなもよ
此山之嶺介迩跡吾見鶴
山やまもりみねよちりと我こそる
月之空有戀毛為鴨
月のそらなるこひもすへかも
為玉乃夜渡月之湯移去者
うつそみのよわたる月のゆつろへを

更哉妹介吾戀将レ居
さらにやいもかわりこひをらん
杉網山夕居雲薄徒ゲ去ゆ者
余者将レ戀名公之目平欲
わをハこひんなまきみをめとりり
君之眼三笠之山介居雲乃
きみりまきる三笠山よりゐる雲乃
立者絶流戀為鴨
たゝハたえしりこひをすらも
久堅之天飛雲介在而然
ひさかたのあまとふ雲にありてしか
君相見落月莫死
きみにあひおつる月なかも
恍保乃内従下風之吹礼波還者
さほの内は嵐のふけはハくるさハ
胡粉
歎乍寐夜永大数
なけきつゝぬる夜ゆよ永すも
級子八師不吹風故玉匣
よゝえゝしゝ風ふかす故玉匣

とハ毎日君をおもふ
なけくそなるべし

開 而 庵宿 之 吾 其悔 す
なげくそわれうくやとつき

八毎夜詩ふの心をもて山詩を推知(おしはかり)一宵八月夜を旅さねおもはれ
えらふ宿をして弁当ひらくハあひ見る日ハとそ思ふ毎夜(よごと)のこゝろ
さかりうらよりハ一 雅保の内とハ幸ひ春日もとをしてえ(え)晩く
咲かゝりてのゝさハやそうそうなるまてとくさハやそうそうまよ
晩かく咲ハやしもし山寺或ハそうそうて散さわきわ春とハいへるの字餘り
夜のさをぬるとも訓す但ゆきハくてみて散きわ春とハいへるの字餘り

ようえやしまねハゆへ ばかまよ注くる八宝抄三ハ笠ともとる奥儀抄三
ハ男の美名のこと被中抄三ハうハさとハいふ心なりとかれとハ
よりとの心なるとりは哥ハ笑ふ心よりとハいふ心なるまれ暑寒と
人を待て風ふきよせて戸叩てわれ人ハ来ねとよりやまねハ
ハ花うつろねハゆへ ハ花うつろねハゆへ ハ花うつろねハゆへ

窓 超 尓 月 臨 照 而 足精 乃
おとこうよ月さいりてしのひまの
下風 吹 夜者 公 平之 其念
うらふきハまさるそうよ

河千鳥 任 澤 上 立 霧之
いちしろりすむさハのうへよりきりの
市白 兼名 相 言 始 而者
いちしろりんなあいいひそめてハ
吾背子之 使 乎待 跡 笠毛 不著
わかせこかつかひを待と笠もきす
出乍 其見之 雨 落 久尓
いてゝ行くそあめの ふりくに
幸 叙 君 尓内 著 欲見
かうこともきみまうらやせんまくほり
戀 其 暁 師 之 雨 零 日平
こひうらゝれしのゝめの雨を
彼方之 赤土 小屋尓 霧霖 零
をちかたの赤土小屋に霧の雨
狭 共 所沾 於身副 我 妹
とこさへぬれ ぬるゝ身にそへわれも
笠 無 登人尓者言 手 雨作見
かさなきと人のいハゝ手に雨作見
留 之 君 我容儀志 所念
とゝまれ君我容儀志おもほゆ

わかせこの使を待と
山ゝくいはまし

ひ〳〵衣き弖ふうらき世 唐衣ハ狩〳〵よき衣ありて縫事て物心地
とりつゝものそれ哭 以呂類聚三毛ちひつゝものとも奥儀抄ふ久〳〵
のとも本乃奥ふ也法輔云とゝみふのこやとハいひやまき家〳〵ことめ志ハ
和名ニハ細雨こゝかりり 兒ハせめてそゝみふのそれハいひやまきをいりん
そて孤乃ふすも深きてぬるとうとよゝもとうそ伝ふる久〳〵
乃とゝみふのそと作りけるハ久〳〵ふ此ことめりとらまきをつきを
いりて頭の上下ゝ〳〵裏ゝれとも今乃諸本をひつゝ
仙ふをひつゝる心ハ那ふあ〳〵きるゝみのそれとゝいふ〳〵ゝみふ
乃こゝとゝ恒壁と毛ふすゝゝも世す土ゝ〳〵壁ぬりまを云下畳
師説ハゝすゝみのそれ土間ゝる家ゝとうき家も土ゝて〳〵ぬるニハ仙説
ゝゝとうこゝ毛の説ふすゝりゝ〳〵ます

さゝりと人ふハいりて 兄妻云毛ハ見ハ毛ふありりとて毛ゝりゝ
童菜ふんゝふハ毛
いもりの中ゝゝゝ

妹 門 去 過 不勝都 久方乃
雨 毛 零 如 可 其 辛肉 撰為
櫻 麻 乃 苧原之下草 露有者 イ加礼ハ
夜 占 閇 吾 袖 尓 置 露平
於公 令視 跡 取 者 消 管

ゆふけとふおりうこゝろもてふをゝ毛のを
きゝみふ久見ん とゝりしハまて
さゝりのさゝれおうりのふ毛ふ裏ふハ
令朝 而射去 安ゝ伊ふ母者りハ雖知
ありてゆくんおやゝゝも
待 不入 者 白細布之
まちうのそうちふいりゝ乃
吾 袖 尓 露者 置 奴 鞘
おりうこゝろもてよ裏ハをきぬゝも

毛ふ〳〵ハうれをよふみて婦りりうゝんねをゝ
ゆふけとふおりうこゝろもてふをゝ毛のを
夜占閇 吾袖 尓置露平
於公 令視 跡取 者消 管
きゝみふ久見ん とゝりしハまて
櫻麻乃苧原之下草露有者イ加礼ハ
童菜ふんゝふハ毛
いもりの中ゝゝゝ
妹門去過不勝都久方乃
雨毛零如可其辛肉撰為
毛ふ〳〵ハうれをよふみて婦りりうゝんねをゝ

ゆふけとふおりうこゝろもてふをゝ毛のを
きゝみふ久見ん とゝりしハまて
さゝりのさゝれおうりのふ毛ふ裏ふハ
令朝而射去安ゝ伊ふ母者りハ雖知
ありてゆくんおやゝゝも
待不入者白細布之
まちうのそうちふいりゝ乃
吾袖尓露者置奴鞘
おりうこゝろもてよ裏ハをきぬゝも

すゝうりうゝおりうゝもうれを桜麻とハゝゝ下畳重菜ゝ
寺類聚童菜 袖中抄の法師ハ裏ゝ〳〵ハありてゆくんおやゝゝ
ゝもと和ス古語拾遺の心ハ人のよゝにおりうゝ人の裏ふぬゝ〳〵れハ此事て裏ゝ〳〵ま

ゆん親は知らむとも
てゆけ妹も知らでも
まちかねて思ふらん
園にもいでと思ふや
ひさにものけやすき
きてみなみてとふ
ますみけれども生き世
世は君を待ん空も
イこま空ゆる雲
ろくとのわこうも
不雲ゆひやす
ゆ心雲待て神ふ
我ふちと我人の
てやすひ空雲や
こまひふおふす
我ふいでろく空

朝露之消容 吾身雖老
ひさにものけやきわひねも
又 若まま 君平恩持待
ますわひてりまみをおう
白細布乃 吾袖 介露者置
ろくとわわこうもてはゆふをまそ
妹者不相 猶頼ゆゆ四手
こもふふあそすゆひみて
云ふふ云 物者不念 朝露之
らまひくまらのそおりそすゆるつゆの
吾身一者君之隨意
わクヌひとりをまみのやにく
凝 霜置 来 朝戸出
ゆふこりのとをさふりひさとふ
跡踐 而 人介 所知名
ひとみたくひとにろる

そ君我のふ我まといん親ひにさふおおふふまよりみそと
ゆふこりの妻をさふクリ 童蒙抄云ゆふこりはタなこりなるとこ君我
乃タふこりをと云心 素タふこりは一夜ばかりにはなきに詠て人
ほとうくそと

契許 戀作 不有者朝介日介
くそりこひてあすはさに日
妹之持履 地介有申尾
いりもんにちよりもと
足日木之山鳥尾乃一峯越
あひきのやまりのおりひとおこ
月見之兒介應戀 思香
ひとめみこまきこのの
吾妹子介相縁平無駿河有
わまもこふのものとみすろる
不盡乃高嶺之燒管香将有
ろくりんねそくつの
荒熊之住去ふ山之師薗迫山
りまもすむこいふ山のもせやま
責而雖一問汝名者不告いは
せめくもあのなはけ

妹之名毛　吾名毛　立者　惜
いもらがなもわがなもたたせりおみえこそ
布仕能　高嶺之　燎　作　渡
みわたしのたかねのともしつくりて
君名毛　妾名毛　立者　惜
一云きみもわがなもたたせりおみえこそ
己曽不盡乃　高山之　燎　作毛居
みえこそつきのたかねのともしつくりて

世間之　女乃　盛尓　有登　波奈乃　色者　移尓家利
よのなかの　をみなのさかりに　あるとはな　いろはうつりにけり
年月者　安良多麻利家利　白雲　毛　千重　尓　山尓　隠　庭
としつきは　あらたまりけり　しらくも　も　ちへ　に　やま　に　かくり　にわ
乎　清　掃　雖待　君　乃　来益　奴
を　きよめ　はけども　きみ　が　きまさぬ
石垣　淵之　隠　而　有　鯉　乎　釣　上　而
いはかき　ふちの　こもり　て　ある　こい　を　つり　あげ　て
将煮　跡　念　妹　乃　待　乍　有　良　武
にむと　おもへ　いも　が　まち　つつ　ある　らむ
伏　以　死　汝　名　羽　不惜
ふして　しな　ば　な　の　なは　をしまず
明日香　川　明日　文将渡　石　走
あすか　かは　あす　も　わたる　いはばしる
遠　心　者　不思　鴨
とほき　こころ　は　おもはず　かも
飛鳥　川　水　往　増　弥日異　所見来
とぶとり　かは　みず　ゆき　まし　やひにけに　ところみえこし
戀　乃　増　者　在　勝　甲斐　毛
こひ　の　まさ　れ　ば　あり　かて　も
真鷹　苅　大野　川原之　水隠
またか　かる　おほの　かはらの　みがくり
戀　来之　妹之　紐　解
こひ　こし　いもが　ひも　とく
悪木之　山下　動　逝　水之
あしき　やま　した　とよみ　ゆく　みの
時　矣　無　雲　戀　度　鴨
とき　を　なみ　くも　こひ　わたる　かも

安太人乃紀伊乃妾郎子　雖為旅寐　不忘
やすひとの　きいの　をとめ　たびね　すれども　わすれず
家乃妹乎
いへの　いもを
集炎乃　寄而　思乎　妻跡　言羽
つどへ　より　おもふ　を　つま　と　いはば
人乃　咎　毛　将有　事　毛　有　来
ひと　の　とが　も　あらむ　こと　も　あり　こ
恐　有　跡　不　相　有　来
かしこく　あり　と　あは　ざり　けり
人乃　可　知　妻　尓　有　来
ひと　の　し　る　つま　に　あり　こ
恐　有　跡　不　相　有　来
かしこく　あり　と　あは　ざり　けり

一二百い序しこ中日名ふにハよく日毎ごとかりそて出ハ埼てなかりしき沼と
まうもかるおろのかりし 八代抔ハかりのうし石尺万おうもかること山奇めるる
へしそこりハふのふかうそしまくハ人さ礼出ろうそてふうやハさしと序奇ふ人ふれねろうこめて逸しし姉よおひうめてうとろさ
あしひさ乃山そと序奇ふ山下ひきはうそまりかけをもふぬをふ出て
ようえやしおそねまゆへいうしうよ 愛 八師 不相 君 故徒 介
此 川 瀬 尓 玉 裳 治 津
はそしおの留もも 泊 湍河 速 水 早 湍半 結 上而
あ裳ハ女乃裳心玉 おをかめてうふ
そうせにそやそふ風 そやそ石根重部
ふほのあをくそうく
まて依そと序奇うし
法て我をおそや
こ同しろくかりてなきうりとろゆると含めしる忌ふしい助ふ

四 長 鳥 居名山 響 尓 行 水乃
名耳 所レ縁之 内うら川 妻 渡女
名平之 所縁而戀 管哉 将在
吾 妹子 者 戀 相 不忠
人平 無 有者之 賀良三 越
而 應 逝 衣
狗 上 之鳥篭 山 金着 不知也河
不知 二五寸許瀬 吾 名 告 奈
五十下

いねうみのとこ天山 序あこいねうみとこの山いと平川皆近江のとし八代
津物うそ神中物奥波奥 いまとときこせいふ奥とこととこと
助宝 けすと六生ととすると 名今六名うり川ととこととこてわう
名そそすると 奥山之木葉隠而行水乃
おく山乃木のはかくれてゆくみのの
序并 音聞從常不レ斯忘
ときーとうれねわすれなと
すい学ま与れすと 言急者中波余騰益水無瀬河
ことくいなのことと四一みなせりて
ことくいなくせ中いとく四 絶跡云事平有趣名満目
事さくいなくせ中いとく四
こと一事四一ふ 明日香河逝湍平早見持遠登
こと一事四一ふ
て中おるるとなう 待良武妹平此日晩津
するとみさぼいは
のおとおとおとうと川ゆくせを 物部乃八十氏川之急瀬
乃すうと川ゆくせを
一云白いそやとの祖 立而毛君者忘金津藻
一云ーとくとまこれうつつも

いねうみのとこ天山 序あこいねうみとこの山いと平川皆近江のとし八代
津物うそ神中物奥波奥 いまとときこせいふ奥とこととこと
助宝 けすと六生ととすると 名今六名うり川ととこととこてわう
名そそすると 奥山之木葉隠而行水乃
おく山乃木のはかくれてゆくみのの
序并 音聞從常不レ斯忘
ときーとうれねわすれなと
すい学ま与れすと 言急者中波余騰益水無瀬河
ことくいなのことと四一みなせりて
ことくいなくせ中いとく四 絶跡云事平有趣名満目
事さくいなくせ中いとく四
こと一事四一ふ 明日香河逝湍平早見持遠登
こと一事四一ふ
て中おるるとなう 待良武妹平此日晩津
するとみさぼいは
のおとおとおとうと川ゆくせを 物部乃八十氏川之急瀬
乃すうと川ゆくせを
一云白いそやとの祖 立而毛君者忘金津藻
一云ーとくとまこれうつつも

いねうみのとこ天山 序あこいねうみとこの山いと平川皆近江のとし八代
津物うそ神中物奥波奥 いまとときこせいふ奥とこととこと
助宝 けすと六生ととすると 名今六名うり川ととこととこてわう
名そそすると 奥山之木葉隠而行水乃
おく山乃木のはかくれてゆくみのの
序并 音聞從常不レ斯忘
ときーとうれねわすれなと
すい学ま与れすと 言急者中波余騰益水無瀬河
ことくいなのことと四一みなせりて
ことくいなくせ中いとく四 絶跡云事平有趣名満目
事さくいなくせ中いとく四
こと一事四一ふ 明日香河逝湍平早見持遠登
こと一事四一ふ
て中おるるとなう 待良武妹平此日晩津
するとみさぼいは
のおとおとおとうと川ゆくせを 物部乃八十氏川之急瀬
乃すうと川ゆくせを
一云白いそやとの祖 立而毛君者忘金津藻
一云ーとくとまこれうつつも

いねうみのとこ天山 序あこいねうみとこの山いと平川皆近江のとし八代
津物うそ神中物奥波奥 いまとときこせいふ奥とこととこと
助宝 けすと六生ととすると 名今六名うり川ととこととこてわう
名そそすると 奥山之木葉隠而行水乃
おく山乃木のはかくれてゆくみのの
序并 音聞從常不レ斯忘
ときーとうれねわすれなと
すい学ま与れすと 言急者中波余騰益水無瀬河
ことくいなのことと四一みなせりて
ことくいなくせ中いとく四 絶跡云事平有趣名満目
事さくいなくせ中いとく四
こと一事四一ふ 明日香河逝湍平早見持遠登
こと一事四一ふ
て中おるるとなう 待良武妹平此日晩津
するとみさぼいは
のおとおとおとうと川ゆくせを 物部乃八十氏川之急瀬
乃すうと川ゆくせを
一云白いそやとの祖 立而毛君者忘金津藻
一云ーとくとまこれうつつも

いねうみのとこ天山 序あこいねうみとこの山いと平川皆近江のとし八代
津物うそ神中物奥波奥 いまとときこせいふ奥とこととこと
助宝 けすと六生ととすると 名今六名うり川ととこととこてわう
名そそすると 奥山之木葉隠而行水乃
おく山乃木のはかくれてゆくみのの
序并 音聞從常不レ斯忘
ときーとうれねわすれなと
すい学ま与れすと 言急者中波余騰益水無瀬河
ことくいなのことと四一みなせりて
ことくいなくせ中いとく四 絶跡云事平有趣名満目
事さくいなくせ中いとく四
こと一事四一ふ 明日香河逝湍平早見持遠登
こと一事四一ふ
て中おるるとなう 待良武妹平此日晩津
するとみさぼいは
のおとおとおとうと川ゆくせを 物部乃八十氏川之急瀬
乃すうと川ゆくせを
一云白いそやとの祖 立而毛君者忘金津藻
一云ーとくとまこれうつつも

いねうみのとこ天山 序あこいねうみとこの山いと平川皆近江のとし八代
津物うそ神中物奥波奥 いまとときこせいふ奥とこととこと
助宝 けすと六生ととすると 名今六名うり川ととこととこてわう
名そそすると 奥山之木葉隠而行水乃
おく山乃木のはかくれてゆくみのの
序并 音聞從常不レ斯忘
ときーとうれねわすれなと
すい学ま与れすと 言急者中波余騰益水無瀬河
ことくいなのことと四一みなせりて
ことくいなくせ中いとく四 絶跡云事平有趣名満目
事さくいなくせ中いとく四
こと一事四一ふ 明日香河逝湍平早見持遠登
こと一事四一ふ
て中おるるとなう 待良武妹平此日晩津
するとみさぼいは
のおとおとおとうと川ゆくせを 物部乃八十氏川之急瀬
乃すうと川ゆくせを
一云白いそやとの祖 立而毛君者忘金津藻
一云ーとくとまこれうつつも

ゐさごろふめでたき世の（世ノ下）世蝶（世ノ下）は哥人ともいはれ仙云才三の句せてみ
みとこゑ鳥こゑ（一せてみれこれいるせのせとりみせ紛諾乃心をおて（せ）ゆるとも（る）名古屋凡のそくき阿弥陀仏
こす阪の川瀬そのやうかとゆるよろこてことうけきそばふるまね
和哥は阪のこくく同とおもひてまてふるくいろいろやまも
類聚童蒙抄云井ゐひさられは凡のかんかのこえんすやすきこされは
阪もしろくとは書ゐそくく人ゐ皆きくれねねゆへ書ふそうとよめるく
乃なくやまとはふよりもろとこゑ童蒙のこふのす類聚云も
しやまもと和一これは阪乃もくゐそくく争花のふるくやちん
世蝶とおもるをおく仙花のきくくりとこゆれいきりくくるか
高山之石本瀧千遊水之
うやまのいそとしきちゆくのの
音尓者不立。戀而雖死
そとうはくそこてきめしも
隠沼下尓戀者餓不足
かこれねのきるまるまうおれいあきいうす

人尓
水鳥乃鴨之住池之下槵無イるく
今日見鸛悒翁き君
玉藻苅井堤乃四賀良美薄可毛
余村女留吾情可聞
吾妹子之笠乃偕手乃和射見野尓
吾者跡尓妹尓告与

都可忘物平

童蒙抄云ひくこ
池のきりへふたの種を
ふりてものを通すこさ
れいそのまくこるまれ
よせて後くるそ七無
古兵ちく新兵ちく
ふるのそのきうこ
上句ハ井堤乃きうくみうすきやうんせきあとをもろ乃こきりおること下句
いえのものくとまねふくく我妹のとめる心ハよとまね我妹きりを
一説一二句ハ落きうもの孤独我心の落きやうんきのきりくとめもと
わきもこうかさん　童蒙抄云わさ業とよりり告こうハ告こせとき

ハ日頭也　奥儀抄云わさみ野ハ野の名也和乃字をさらんとてかりてと
いふ也かりてとハ笠を付る故也されとハ笠の縫に付る縫に付るとされハ
笠のかりての縫とハいふ也笠とらんとてわきもことハとつゝけり　予案わさみ
野ハ美濃の也 奥儀抄乃説 我ハ入ねとハ下句に付てよくかなへるや 我心のみの
かりそり童蒙抄乃義と同しき説ある堀河百首に公実
かりそのわさ菅をうちきてのとやゐ濃にしんと読りけるも菅とききこゆれハ
是ハ笠を縫ことくに縫を付る故也わさみのハよき菅あるくせ菅あるよし
きれを美濃の和射見原よいひかけて我ハ入ねと嫁よきこせとぞいふ也 仙覚抄
けやうさあまねくなをしもと
名ハ人の大切の物也一生ニ
一つひ漏きても後代を
きゝかうし 此類よ秘蔵
けうね名とふ力埋木ハ
下ふどいひん諷詞也 只
こともすれ名もてハる
るうきさ名やさてんなり

2723
数多不有名乎霜惜三埋木之
下従其恋去方不知而
あまたあらぬなをしもおしみうもれきの
したゆそこふるゆくへしらすて

2724
冷風之千江之浦廻乃木積成
心者依後者雖不知
あさかせのちえのうらわのこつみなす
こころはよりぬのちはしらねと

2725
白細砂三津之黄土色出而不云耳衣我恋楽者
しろたへの　一作しろまさこ　みつのはにふの
いろにいてていはすはかりそわかこふらくは

来和ねハて見る事也
あさ風のちえの浦とハ
千江の浦 八雲抄ニ不見云
よる所の也 此集廿二
摂津より紀伊河内
ある所にて二秋風
乃此浦に来て寄る
こつみたまりて
あるね乃諷詞也

2726
風不吹浦尒浪立無名乎吾者負香逢者無二
かせふかぬうらになみたちなきなをもわれはおふかもあふとはなしに
一云女跡念而
一云をとめとおもひて

2727
酢蛾嶋之夏身乃浦尒依浪間文置吾不念君
すかしまのなつみのうらによるなみの
あひたもおきすわかおもはなくに

此寄 童蒙抄にも白まさこと見えてそれとハ黄土と
かくかりこそ三津ハ難波の三津なる也 一二句ハ序也 白まさこ心ハ月
かせあつかねうらに波たち一二句ハあきらか立と云諷詞也 一云
すことれきつみのう 八雲抄云すかしま 紀伊 万葉きつみのうらとよめり
きりとや 仙覚抄云 波ハ物波立てこそ中にかちいさき波高を走く波と
よかりやうにふよる波も ひまハあいまて我をおもふ心ハ條すとよめる也

2728 2729 2730 2731 2732 2733 2734 2735

淡海之海　奥津嶋山　奥聞経而
うみのみおきつしまやま　おくにきこえて
我念妹之言
わがおもいいもがこと
霰打礼　遠津大浦　介縁浪
あられうち　とおつおおうら　よるなみの
縦毛依　十方　憎不有君
よしもよるも　とにかくに　にくくはあらず
木海之　名高之浦尓依浪
きのうみの　なたかのうらに　よするなみの
音高鳥
おとたかく
不相子故尓
あわぬこゆえに
牛窓之浪乃鹽左猪嶋郷音
うしまどの　なみのしおさゐ　しまさとおと
所依之君尓不相鴨将有
よりしきみに　あわぬかも　いまあらん
奥波邊浪之来縁左太能浦之
おきつなみ　へなみの　きよるさだの　うらの
此左太過而後将戀可聞
これさだすぎて　のちにこひんも

万十一下　五十五

淡海之海　奥津嶋山　奥聞経而
あふみのうみ　おきつしまやま　おくにきこえて
我念妹之言
わがおもいいもがこと
霰打礼　遠津大浦　介縁浪
あられうち　とおつおおうら　よるなみの
縦毛依　十方　憎不有君
よしもよるも　とにかくに　にくくはあらず
木海之　名高之浦尓依浪
きのうみの　なたかのうらに　よするなみの
音高鳥
おとたかく
不相子故尓
あわぬこゆえに
牛窓之浪乃鹽左猪嶋郷音
うしまどの　なみのしおさゐ　しまさとおと
所依之君尓不相鴨将有
よりしきみに　あわぬかも　いまあらん
奥波邊浪之来縁左太能浦之
おきつなみ　へなみの　きよるさだの　うらの
此左太過而後将戀可聞
これさだすぎて　のちにこひんも

牛窓之海乃心
うしまどの　うみのこころ
童蒙抄曰此乃三句序也
おきつなみへなみの　童蒙抄曰　此乃三句序也
八十島祭之日奏之
やそしまのまつりの　日にこれを　そうす
こは序歌也
こは　序歌也
細砂ニサヨ類聚
細砂ニサヨ　類聚
宮あくハ一月古点
宮あくハ一月　古点
心はなの音かと
心はなの音かと
すみよしの岸の濱
すみよしの　岸の濱
岸の濱名所也集
岸の濱　名所也　集
十六ニ住吉の岸野の
十六ニ　住吉の岸野の
萩の白はせと
萩の白はせと
白ハ類聚ニハ志ロク
白ハ類聚ニハ　志ロク
妹とよめるハ名ゆく
妹とよめるハ　名ゆく
妹とて和スおもふ
妹とて和スおもふ
ハ濱ハ浪ハ
ハ濱ハ浪ハ
仙点かすみ
仙点かすみ

白浪之来縁
しらなみの　よるなみの
有申物尾戀作不有者
ありもうすものを　こひつつあらず
鹽浦者水沫介浮
しおのうらは　みなわにうかぶ
細砂イまさこ
吾生鹿戀者不死而
わがいきしかは　こひはしなずて
住吉之城師乃浦箕イま尓布イき浪之
すみのえの　きしのうみに　しきなみの
數イくもなく
かずくもなく
妹平見因欲得
いもをみるよし　もがも

2736 2737 2738 2739 2740

風をいたみいたぶる
序なりいたぶるは甚
ゆるかしうごく意なり
八隅しゝ我おほきみ
（まへの）類聚にひま
もなくと和訓点あり
こふくといへり
おほとものみつの白波
大伴三津はなにはの序
序也
たゆたふ
序也たゆたふ八巻
おほつかなくゆるく
みさごゐるおきつあら
水沙兒集三小注にみさご
沙と鴨とハもと類聚あ

2736
風緒　痛　甚　振　浪　能　間　無（能間イあひだ無）
風をいたみいたぶる浪のあひだなく
吾念　君　相念　濫　香
わがおもふ君はあひおもふらんか

2737
大　伴之　三津乃　白　浪　間　無（間イあひだ無）
おほとものみつのしら浪あひだなく
我　戀　良苦乎　人之　不知　久
わがこふらくを人のしらなく

2738
大　舩　乃　絶　多經　海　重石　下
大ぶねのたゆたふ海にいかりおろし
何如　為　鴨　吾　戀　将止
いかにせばかもわがこひやまん

2739
水沙兒　居　奥　麁　礒尓　縁　浪
みさごゐるおきのあらいそによする浪
往　方毛　不知　吾　戀　久波
ゆくへもしらずわがこふらくは

2740
おきつよのへのいらにしよる波の
よるしもわすてきみがまにく

2741 2742 2743

没一作不好序也こ
ひのまさるなりけり
大船のいかりおろし
序なりこふる
も君ふよかて悩んと
おほうみにたつらん
君まにことまのやむ
ときもなし
しかのあまのほのけ
かきたてやくしほの
からきこひ
仙ひらの浦
二八近江とかけ
つけてよめり
盛るうさふたつ

2741
大　海二　立　良武　浪者　間　将有（将イ有）
おほうみにたつらん波はあひだあらん
公二　戀等九　止時　毛　梨
きみにこふらくやむときもなし

2742
牡鹿　海部乃　火氣　焼　立而　燎　鹽乃（火氣イほのけ）
しかのあまのほのけたきたてやくしほの
辛　戀　毛　吾　為　鴨
からきこひをもわれはするかも

此一首或云石川君子（キミコノ）朝臣作

2743
中中　二　君　二　不戀者　枚　浦乃
なかなかにきみにこひずはひらのうらの
白水郎　有　申　尾　玉　藻　苅　管
あまならましを玉もかりつゝ
一云　中中　尒　君　尒　不戀波　留　鳥　浦　之　海部　尒　有　益　男　珠　藻　苅　苅
一云なかなかにきみにこひずはあ
みのうらのあまにあらましを玉
もかるかる

2744 2745 2746 2747 2748 2749 2750

鈴木取てる海部之燭火ゐくしの外谷
すきさるうれしひようこいも
不見人故戀比日
えぬ人をうらこるこのころ
漾之葬別小船障多見
今るといわのうらけをみさわるみ
吾念君尒不相頃者鴨
わらおもふきみとりあいねころも
庭浄奥方榜出海士舟乃
かくきみなきへこきいるなす舟の
執掃間無戀為鴨
ちらるるきこひすもしなし
味鎌之塩津平射而水手舩之
うちわれこるをさてうるもの
名者謂手師平不相将有八方
名いひてをうらめやも
玉手池乃鳴鶴舟容與舟皆西京雑記云
いまちかひきよわりのかくるとし
驛路イむやかに引舟渡直乘尒
妹心尒乘來鴨
妹情尒乘來鴨
いもりこころのりよるるし
吾妹子不相久馬下
わきもこのありてひさくいもまつの
阿倍橋乃蘿生左右イむまよ
うへてるまつこけむすまて

舟葦荷苅積四首見似業
おほふねよりのかにつみよせて
のる奥儀抄心かくる心よ
もち八七句ゐ心
舟葦荷ハなき物なるを
通ハこよみよみて
ちりく妹乃心のこと
云て舟の縁なり
ふねまちふひき舟
ちりくる安きむまれ
小縄をつけるを
栗むしやれ人往還乃名所鈹今近神功皇后百濟乃使久底留り
多沙城をのひく為往還路驛これむしやれの始と日本紀九二あり山号
そこのりの小妹乃心うのりしいこん序意
わきもこにありてひさく馬下古点ひまちてのく
生左右新点ひすまそりうの
うへてるまつこけむすまて神中於云七巻食經云橙和名安倍太知波奈似柚而

2757　2756　2755　2754　2753　2752　2751

小(チヒサキ)者也とて仙覚ハいへり此ハたちばなの一名なるべしと詞林采葉
云からたちとて甘子乃皮のあつくかうばしきをいふとも柑子と
いへりたちとハ別物なりや　格物論云橙ハ橘ノ属樹高シ枝葉不類於
橘ニ亦有刺大者如盃苞薄皮厚香氣馥郁可ク以テ薫ス衣ニ可シ以テ漬ス蜜ニ
真ニ佳實ナリといふこしかれとハ古のからたちや仙覚ハいふものゝ点を改めて
注云るハ心にも似て常に伏るものなく掲しなれハいふまじきお〔云苑
ことにくたちハいへるを云陀羅と但類聚袖中抄なとにあるよりこのよし云

あぢのすむすさの入江に
八雲抄に鰺(アヂ)といふ魚乃
下にも類聚にも見ゆ
魚乃部類にも一説ハ
味ハ多しミにすさの
入江に八雲抄にハ紀にと
くあ待といへり序なり
まさしくをさまつりの

味乃住　渚沙乃入江之荒礒松
あぢのすむすさのいりえのあらそまつ
我乎待　兒等波　但一耳
わをまつこらハたゞひとりのミ

吾妹兒乎聞　都賀野邊能　靡合歡木
わぎもこをきゝつがのべのしなひねぶ
吾者隱不得　間無念者
われハしのびえずまなくしおもへバ

ききけりのへ木歡　兄安云歡合歡木ねぶりの木也とこねきもことゆてしよきく

こハおもひすと云也
なみまより見ゆる小島の
楸ハ序なり濱久木ハ小
濱楸久しく成ぬ君に
あひみずしてといへり
ゆふがしはぬるやとて
おミハ秋柏とミえハ朝の
柏ぬるやかはへのしのゝめ
をうへてしのゝめハいふを
むしろ序なりしのゝめの
えたる類聚の和歌抄に
ハしのゝめの見てゆめとこ
あさちはらかりしめ
虚言をとりてしるしあさ
すまことゝいひけし秋を
頌せんとて虚言(ソラコト)なと

浪間從　所見小島之濱久木
なみまよりみゆるこしまのはまひさき
久成奴　君爾不相四手
ひさしくなりぬきみにあはずして

朝柏　潤八河邊之小竹之眼笑
あさがしはぬるやかはべのしのゝめの
思而宿者　夢所見來
おもひてぬれバゆめにミえける

淺茅原　苅標刺而　空事文
あさぢはらかりしめさしてむなごとも
所縁之君之　辭鴛鴦將待
よせてしきみがことをしまたん

月草之　借有命　在人乎
つきくさのかりなるいのちあるひとを
何知而鹿　後毛將相云
いかにしりてかのちもあはんといふ

王之　御笠爾縫有　在間菅
おほきみのみかさにぬへるありますげ
有管雖看　事無吾妹
ありつゝ見れどことなきわぎもこ

よせいつる意ことを我しまちゝゐまんよろつゑしこの思ゐるやし
なきむさ乃なりかる　祇日月ゑこゝハうつしよわかれハ別れをもとめこゝろく
なりかる命ことよりなりかる命乃人をとはむ人ハ親まぬと見ゆれなりかる
る命なる我を信てあるんとなとよりなね我をとよりなり人をとうなる命
こゝひうとし但馬別乃人ハなりも成ぬへし　素性ハ雖無事もなくといふにもあらす也と
おかしき乃みつとに　童蒙抄云此の歌ハ一首とよめるも一説に
是序歌也て久きにそれに雖なる妹かなりとまことにまきさハなかむ様と

2758
菅根之懃妹尓戀西益
すかのねのねもころいもにこひにしも
卜思心不所念鳥
うらおもふこゝろおもほえぬかも

すゝのねもころ
菅の根ハねもころといはむ
けん調にいる守りハ
哀なる心にあるなりて
きかしさるの字を我
とかなの字を後に添こし

2759
吾屋戸之穂蓼古幹採生之
わかやとのほたてふるからつみはやし
實成左右二君乎志将待
みになるまてにきみをしまたん

わりやとのかりそて
左りハ古幹に穂蓼
乃古幹つみて育よ

2760
足檜之山澤徊具乎採将去
あしひきのやまさはゑくをつみにゆかん
日谷毛相為母者責十方
ひたにもあはしはゝはせむとも

あるまてハ久しきをいふ
いふこゝろ也
あしひきの山はそのむかしいきれ山路にて
ゑくおほつなるくはゑくなり
みなもそれつふゆく
日あひきあはんを
おくやまはいそもと
序歌也

2761
奥山之石本菅乃根深毛
おくやまのいはもとすけのねふかくも
所思鴨吾念妻者
おもほゆるかもわかおもふつまは

あしかきのなかの
是も序歌也
いふ事の似るこ
よろこひてゑみて
あらはれぬやう

2762
蘆垣之中之似兒草尓故余漢
あしかきのなかのにこくさにこよかに
我共咲為而人尓所知名
われとゑまして人にしらるな

ゑみて序歌也
これなゐのあさはの野　信濃或ハ武蔵とあり童蒙抄云
のゝとハ野をいふとのふのゝよるかやのとハ野にいふもの
とみてしより集に浅葉野にとよみなるをもて浅葉野と

2763
紅之淺葉乃野良尓苅草乃
くれなゐのあさはのゝらにかるかやの
束之間毛吾忘渚菜
つかのあひたもわをわすらすな

為妹遺在荊薦之寿而懇死物平念乱而可死鬼平思

吾妹子介懇作不有者荊薦之

島江之薦半荊介社

吾平婆公者念有来

江乃白菅乃

山橘之色出而

足引乃

山橘八弖杼よ一説牡丹ぞと哥心いろ不出来ぬ

吾癒南雉八目難為名

葬多頭乃颯江乃白菅乃

吾背子介吾癒良久者夏草之

荊除れ生及如

道邊乃五柴子の原能何時毛何時毛

人之将縦言乎思将待

吾妹子之袖平憑而真野浦之

小菅乃笠平不著而来二来有

市柴取守と云をこゝにかたぶけて市柴の心うつりてよく云ふ柴市柴同事

わすもこゝ神をゝあて童髪折云神笠を折て云てもゝ八代おゝ云まのうらのみ

吾妹子之袖平憑而真野浦之

わすもこゝ神をゝのみゝくゝのほりの小菅乃笠平不着而来二来有

おゝいけのこすげをまくらにこすけをきこにぬゝて

真野池之小菅平笠介不縫為

まくらにけりこすけをきこにぬゝて

人之遠名乎可立物可

いとのこをゝをゝうゝまきこうのゝ

刺竹齒隠有吾背子之

さす竹乃をこれるわせこゝ

吾許不来者吾将戀八方

わゝこすけこゝれこゝめやも

神南備能淺小竹原乃美妾

みまくほりあさゝゝのをゝる

思公之聲之知来口

おもふるさゝみゝこのたゝるけゝ

山高谷邊蔓在玉菖

山ゝゝみゝくゝよゝるゝゝゝ

絶時無見因毛欲得

ゝゝるゝきゝるゝゝゝもゝゝ

疊薦隔編數通

多ゝみこゝへゝあむゝすゝゝゝ

道之柴草不生有申尾

みちのゝしゝゝゝゝゝゝゝ

水底介生玉藻之

ゝゝるゝこにおゝるゝゝゝ

縦比者而将通

ゝこれゝゝゝゝゝゝ

海原之奥津縄乗打靡

うゝりゝおゝゝゝのゝ

心裏四怨介

ゝゝもゝのゝりおゝゝゝ

鴨

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山ゝゝみゝくゝよゝるゝゝゝ

神南備能淺小竹原乃美妾

みまくほりあさゝゝのをゝる

思公之聲之知来口

おもふるさゝみゝこのたゝるけゝ

おもふるさゝみゝこのたゝるけゝ

縦比者而将通

ゝこれゝゝゝゝゝゝ

海原之奥津縄乗打靡

うゝりゝおゝゝゝのゝ

心裏四怨介

ゝゝもゝのゝりおゝゝゝ

鴨

へてうくゝ叫比乃汚くゝ可さ利といくて亜ひくふ可うん之ゑ
うおりくゝ乃おさうるそのり 縄苔(なわのり)海藻(かいそう)くゝ一二句ういちるひきもいうん
序くゝ打ちひきハ一平等ふこうふ可ふ可ゆもこのふゝゆもにねなゝ
むゝさきのるゝうれ 紫之名高乃浦之藻藻之
なのみうるのほお汚 情者妹尓因西鬼平
序ゑくゝおひさ藻ハ こゝろをいもうよりみゆゝのを
りくゝるおれいゝ 奥乎深目手生海底
わゝこうなのおきを保めて わゝこれみのおさをみのめてゐるゝの
和名云崔禹錫食経 寂今社戀者為便無寸
曰沈者曰藻浮者曰 いこゝろしゆゝのゝこゝろひくゝすゝなゝき
蘋(ふのり)おきを添ゝそれ 尤縣蟹觸孰共毛宿常奥藻之
ゆるといはゆゝゝ上句 さねゝふゝれゝるゝねゝゆゝゝ神つゝもゝ乃
いうもこゝろん序くゝ今 名延之君之言待吾妹
うゝ意いとすゝゑゝと きこゝかゝことゝゆゝわれを
さねゝふゝれゝるゝ 吾妹子之奈何跡裳吾不思者
或説さねゝふゝれゝる人言 わゝきもこゝろゝゐゝもゝわゝゝをゝもゝゝのゝそ
含(ふくめる)花之穂應咲
みゝゆゝるゝそれゝるゝ

すれいおゝるねゝれゝ
ゝゝ未知正説をゝ考
わゝきゝこゝうゝゝも
ゝゝうゝもゝゝなゝ
妹りゝゝゝも我をゝゝね
ゝゝゝゝ知せんこと
ゝのひゝゝ立てゝゝゝ
心明く類聚古集ハ敦隆
乃作ゝ鶏冠草をゝ類聚
をゝゝて月草ゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
心明く
ゝゝゝれ白る
山吹ハ白てゝいゝ説
白るはいうゝき忠

隠庭戀而死鞆三苑原之
志のひゝおいこゝひくゝゝねゝもゝみゝその花
鶏冠草つきゝゝの花乃色二出目八方
ゝゝれゝゆゝのゝゝおいてゆゝもゝ

類聚古集ニ云鴨頭草又作レ鶏冠草ニ云ニ依ニ此義ニ者可レ訓ニ月草ヲ歟

雖レ咲(さくとゝいへども)
さくゝゝるハすゝるゝゝゝれゝゝ系統流
心乃うゝもゝやゝゝ止時毛梨
山振之ホ保敞流妹之契酢多乃
赤裳之西邪見笑
あゝゝのすゝゝゆゝゝ
ゝ地之伝ゝ極玉緒之
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ堂会ゝゝゝゝ妹之名見法

生緒介念有苦玉緒乃
いやものをふかくおもひそめてし人の命の
絶天乱名知者知友
たえはてんとはおもはねどかねてぞものは悲しかりける
玉緒之絶而有戀之乱者
これもまた玉緒のごとくながくあれかしとねがふ歌なり
死巻耳其又毛不レ相為而
恋もせぬ人にしあらばほととぎす
玉緒之久栗縁乍末終
なきてわたれとおもはましやは
生者不レ剖統将レ待
玉緒之島之意哉手弱乃
たわやめの身にしあれば
片緑用貫有玉之緒辛弱
乱哉為南人之可レ知
たわやめとおもへるものをますらをの
玉緒之島之意哉手弱乃
たわやめとおもへるものをますらをの
行易及姉介不レ逢将有
ゆきかへるまでにだにもあはんとや
玉緒之間毛不レ欲レ見
たまのをのあはぬこころもあるものを
吾心隠津之澤辛苦見有石根従レ毛
わがこころかくつの沢のいはがねのこごりてのみ
逢而念君尓相巻者
あひてしおもはばかくもこひめやも

以上巻のなかこころ

大海之荒磯之渚鳥朝名寸名
おほうみのありそのすどりあさなさな
見巻欲平不二毛見公可開
みまくほりすもきみをしねがひ
令友平金津三拝木之
しむるともかなつのみつにをがみ
山多毛尾之永
やまにもをのながきこのごと
一云日木乃山鳥之尾乃四垂
ひきのやまどりのをのごと
尾乃長永
おのながながし
夜平鴨将宿
よをひとりかもねん

里中尓鳴奈流鶏之
さとなかになくなるとりの
声令聞如
こゑのごとく
一云里動鳴成鶏之
一云さとどよむなるにはとりの

喚立而甚者不二鳴隠妻羽毛
よびたてていたくはなかばかくりづまはね
高山尓高部乃渡
たかやまにたかべのわたり
余待公平待埼一出可開
あれまつきみをまちてさきいでむ
伊往波従縦喚鶴乃高行倡毛
いせのうみよおきこぐとよむたづのたかゆきさけも
君之
きみがまにまに
吾将為
わがせむ
吾妹児尓玄八方
わぎもこにゆやも
暫之寂寞
しましのさびしさ
可堪
たへむ
千鳥数喚白細乃
ちどりしばなくしろたへの
君之手枕未二厭
きみがたまくらいまだあかなくに

問答 二十九首

柿本朝臣人麻呂九首

二首

皇祖 乃神 御門 乎懼 見等

すめろきの神の御門をかしこみと日本乃 侍従 時 尓 相流 公鴨

思ふをのそきうの下に立すめろきれ神の御門とは帝をこそ

真祖 鏡 雖見 飽 限

まそ鏡見とも言ふ飽き足らぬ

石垣 淵 乃 隠 而在 戀

いはかきふちの隠りてし恋

三首

赤駒 之 足我枳 速 者 雲 居 尓毛

あかこまの足掻き速けばくも居にも

隠往 序 袖 巻 吾 妹

隠り往くを袖巻き我妹

恐 道 曽 戀

かしこきろうこそ恋

味酒 乎 三毛侶乃 山 尓 立 月之

うまさけを三毛侶の山に立つ月の

見我 今 欲 君 馬之 足 音曽 為

見れど今欲き君が馬の足音ぞする

二首

雷 神 少 動 鳴 而 雲

あまの神少し動き鳴りてさく雲

あまの神少し動き鳴りてさく雲

雨乍零 耶 君待 留
かめれかもやきみがこもれる
雷神 少 動 雖不零
あまつかみ をとめのきりと なりとよみ
吾 待留 者
わがまつきみを いつしかもこん
二首
布細布 枕 動 夜不寐
しきたへの まくらうごきて ねのかへし
思 人 後 相物
おもひびとの ありしものから
敷細布 枕 人事問 哉
しきたへの まくらゆ ひとごとの
其 枕 苔生 員為
そのまくら こけむすまでに
二首 作者未詳
眉根掻 鼻火紐解 待 八方
まよねかき はなひもときて まつやも

事 我 妻 語 得
おもふこと わがつまにかたり
弖上小出 而 待 者
てにこいで まつらむものを
此一首上古時人之歌
この一首は、上古の時の人の歌
也 但 今 時 無 此 歌
なり。ただし今の時にこの歌なし。
何時毛 将見 跡 戀 来 吾 乎
いつしかも みむと こひこし われを
此一首見柿本朝臣人麻呂歌中 以 間
この一首は柿本朝臣人麻呂の歌の中に、間
答故 再載之 下
こたふるがゆゑに、再びこれを載す。下に
今日有 者 鼻之 大 眉可由見
けふのみに あらばはなの おほきをも まゆによりみむ
思 之 言 者 君 西 在 来
おもふといへば きみにし あらくも
おもひつつ ことはきみにし ありこそ
二首
音耳 平 聞 而哉 恋 犬馬鏡
おとのみを きくにしやこひむ いぬまかがみ
目 直 相 而 戀 巻裳 太 口
まのあたり あひてこひまく おほくちも
此 言 平 聞 跡 不 真十鏡
この ことを きくとふれども まそかがみ
照 月 夜 裳 闇 耳 見
てれる つきよも やみにのみみ

二首

吾妹兒介衣而白細布之
わもこころきくとあやうかに衣ぬとはさらす妹之去夜
とはさらす妹之去夜
袖反而
そてかへしいもかそてさやに
吾背子之袖反
わせこかそてかへしてよいめかも
真毛君尓如相有
まことも君かことくあらなくに

二首

諾小兒欲得こそ
諾小兒欲得
うけらくのほしき子ならは
うけらくのほしき子ならは
吾戀者名草目金津真氣長
わかこひはなくさめかたし
わかこひはなくさめかたし
夢不見而年之經去礼者
いめにたに見ぬ年の經去れは
夢毛不所見雖絶
いめにたにみえぬ年のへぬれは
吾之片戀者止時毛不有
わかかたこひはやむときもなし

二首

浦觸而物莫念
うらふれてものおもひそなき
浦觸而物莫念
うらふれてものおもひそなき
絶多不心吾念
たえたるこころわかおもふ
絶多不心吾念
たえたるこころわかおもふ
浦觸而物者不念水無瀬川
うらふれてものはおもはす水無瀬川
浦觸而物者不念水無瀬川
うらふれてものはおもはす水無瀬川

有而毛水∞者 遊 去 物平
なりてとそゆくてふものを

二首
垣津旗 閧 沼之菅 半笠介 縫
なさけりさくぬのすげと笠なめて
將著月半待 介 宇曽經去來
まん日へよりそへなくる
臨照 難 波 菅 笠 置 古之
そてもあかすのかさをきみ
後 者誰∞將著笠 有 莫國
のもそうまんなさるまくか

二首
即是谷 裳 妹平待 南 尼夜深而
出來 月之傾 二手荷
いてくるつきみつくまそ
木間 從穢壁 月之影∞惜
このまもりうつろふ月のかけみ

徘徊
もやすみよさよふけぬそら
介尼夜 深去家里

と笠まもりて法
つくるも妹を
妹のまつきまもる
彼方におもふ人あらんとかこう心し
行もしおもふ人あらんと労せんと法をひてくる心
このまもりうつろふ月をそまつ立やすみまた妻を
しまもるかと詠る心

二首
枕 領巾乃 白 濵 浪乃不音縁
多くひれのきてうつ浪のおもへと
荒 振 妹 介戀作 首 居
あるいもうこひつつそをる
鳥流 巳呂可毛

一云 こうるこうつも
加敝良 未介 君 社 吾介枕 領巾之
かへらまにきてまもるまもるひれの
白 濵 浪 乃 縁 時 毛無
きてうつ浪のまことまもあ

かへらまにかへるまもあねよけすきそよ

二首 念

人 持来跡知 者 八重六舎
布 屋尓 珠 益平
玉 数 有 実毛 何 持為 八重六倉
小屋毛 妹 與 居なま者

二首 作 有 名草 目手玉緒之
如是為 別 者為使 可無
紅 之深深 乃 衣 平下 著者
入之見 久尓仁寶比 持出鴨

二首 深 著 持 而可行 所 念

警喩 共十三首

寄衣喩思 二首

紅 衣 霜 多 在 南取易而
著 者也 君之面 忘 而有

寄弓喻思 一首

梓弓 巻 易 中 見 判

うつさらうゆつかさきく おてくく
更 雖引 君 之 隨 意

さくふしくくもさみかやう

寄船喻思 一首

水沙兒 居 清 座舩之夕鹽平

今さこあるすに をる舟のゆきおそを
待 従 者 吾 社 益

まちんなりいわまこそめやさこめ

寄魚喻思 一首

山 河 水 釜 伏 而 不音盛

やまかわのかうへへみせるまくのりくるど

年 之 八 蔵 平 吾 竊 懈 師

うちかやとせをわかぬとやまい

寄水喻思 一首

葦 鴨 之 多 集 池 水 雖溢

かけのもかすぐ池 方余 吾 将越 八方

儲 薦 方余 吾 将越 八方

おけのもかすぐ池 方余 吾 将越 八方

まをなるさんとそ

万十下 七十

寄菓喩思一首

日本之室原乃毛桃本繁
言ハク大王物乎不成不正
人引目八面吾莫名國
いとゐやもわれをなるかも

寄草喩思一首

真萬延小野之淺茅平自心毛
あさちとふものあさちところゆも
人いくもうべりちんこの心をこそ

仙覺云

三島菅時待者
不著也將成三島菅笠
きすやなりなん三島菅笠
三吉野之水具麻我菅平不編余
みよしのの水具麻我菅すけとあやふく
苅耳苅而將亂跡也
かりのみかりてみだれなん
河上小洗若菜之流来而
かはかみにあらひわかなのながれきて
妹之當乃瀬社門月
いもがたのせこそかどでせ

2840　2839

けるをわか身にさしくへて嫌つあかりけりよそめにもよむなるへし
かくしてやなほやなりなんや
なりなんやいはゝなる也
はいつまても伊勢物語
まいてまたおもふくに
にやゝまんとゝかく
ときくやうの心やいはゞ也
大荒木の浮田の森は
山城の國なりとあり
何の定の名所も
大荒木とゝいへともし
此國の名にはなし

寄標喩思　一首

如是為哉　猶八成　牛鳴　大荒木之
浮田之杜之　標　不有尓
かくしてや　なほやなりなん　おほあらきの
うきたのもりの　しめならなくに

寄瀑喩思　一首

幾多こちたくも　不零　雨故　吾背子之
三名乃　幾許　瀑毛　動響二
いくはくも　ふらぬあめゆへ　わかせこか
みなのこゝたく　たきもとゝろに

うへし其心ハかのうきれにかの名ハしりぬをかへ極とて
よくよく何も我心も社れおもふ人もあるへしとのみ心のもかく
ありとへて此よそて絶りしてにや思ひんとあけくもし
いくそくもかつねる名ゆへ此かの名よ類聚ありハこちたくも此月哉

あきらへし此ハあはつくうつてこゝろのちして我もかりるうつてもかはねあ
中心難もこゝろりひとくさしまきしけりせのあひりさらうても
けりぬりわかせこら御名乃こちたくことしちて世に立ゆ中にとて
よめるなりといふはもしこれかへきおもひおもふて是いこれこと
やうにけりのこりいやうにもよめるハも一首乃うちのくけりはこともあさく
こゝし作るを此集のしてへさまにもしかきあまもいまてにてへし
乃やうにもしてへいりかをよめるうらみて思ひさまもけりて
しまへし枝の御代ときもあまりハよまれねかくさしとかきりく作れと初
にり人のこゝろ兜女乃これ心ひしらるもひしも名まやりしりゆくさく
作るるれハされしのくめりちりしく生きのみ皆をもちて作る道
名乃けゆるを難まちゆるよ古今よ名のこゝろハよりの何の難は此の
ごさくけるしるひし

萬葉集巻第十一終

貞享三年三月十六日書此一巻於新玉津嶋寶前　墨付七十二枚